

巻 頭 言

例年になく厳しい寒気に日本列島が覆われ、スケート競技やカーリングで日本選手の活躍に一喜一憂した平昌オリンピックも終わり、ようやく春がそこまで来ていると感じる季節になりました。

平成 28 年 7 月、加古川中央市民病院が開院し 1 年 8 か月が経ちました。この間、皆様には病院に対して、温かいご理解とご協力をいただき深く感謝申し上げます。開院後のあわただしい時期から少し落ち着きを取り戻し、新病院として改めて「質」にこだわり、医療技術、医療安全、患者・職員満足度、そして経営の 4 つの視点で医療の質の向上に取り組んでいるところです。



この数年、医療を取り巻く環境は刻々と変化すると共に、益々厳しさを増しています。医療の安全を確保するために医療事故の再発防止を目的とした医療事故調査制度が導入され、少子高齢化社会、多死社会にむけて看取りの議論や住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることが出来る地域包括ケアシステムの構築への取り組みが行われています。高齢化の進展による医療・介護の需要増大に対応するため病床機能報告制度に基づき地域医療構想に向けた地域での調整会議も始まりました。そして、平成 30 年度診療報酬・介護報酬同時改定、第 7 次保険医療計画策定、第 7 期介護保険事業計画、国民健康保険の財政都道府県単位化など、「惑星直列」と呼ばれる新たな改革が次々と待ち受けています。また、働き方改革の議論が進む一方で、1 年先延ばしになった新専門医制度での研修が始まります。目まぐるしい環境の変化に即応しながら診療機能の一層の充実を図り、地域住民の健康を支えるべく、職員一丸となって取り組んでまいります。宜しく、ご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。

加古川市民病院機構学術誌第 7 号には、平成 28 年度の病院の概要並びに職員の論文や学会発表などの研究業績が盛り込まれています。ご覧いただき忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。最後に、本誌の取り纏めにご尽力頂いた編集委員や職員の方々に深謝申し上げます。

平成 30 年 3 月

加古川市民病院機構 理事長
加古川中央市民病院 院長
大 西 祥 男